

# 会員登壇

(その一〇八)

## 佐々木 知子先生

きき手 中島 啓雄



佐々木 知子 先生

— 今日「会員登壇」にお越しをいただきまして、本当にありがとうございます。弁護士というお仕事のおかげに、大学教授とか社外取締役とか家庭裁判所の調停委員とか、いろいろお忙しい中をありがとうございます。

恒例ですので、生い立ちからお話しただきたいと思えます。

**佐々木** 昭和三〇年広島市で生まれました。父が川重に勤めるようになった関係で、二つで神戸に来ました。それで垂水幼稚園・小学校から、入試を受けて神戸大学附属明石中学に進みました。親は、子供は地元の公立に行かせる考えだったので、本来なら垂水中学に行くはずでしたが、そのころ、西明石の分譲地を買って家を建てていた関係で、途中転校になるのはかわいそうだと。小学校の担任には神戸女学院中学を勧められたんですが、あそこは有名なお嬢さん学校で、私服だしサラリーマン家庭では無理、しかも通学が遠くて大変ということで地元の国立中学に決まりました。

残念ながら附属高校はないので地元の明石高校に行き、神戸大学の法学部に進みました。親が、通学できる公立しか行かせない

ということ。

—— 大体は明石でお育ちになったという感じですね。  
 佐々木 そうですね。十二歳から大学を卒業して検事になるまで。

—— 中学、高校のころの得意科目、英語はお得意だったんでしょうけれど。

佐々木 英語と国語は得意ですね。実は、数学も高校では成績が良くて、数学の先生(女性)からご自分と同じ神戸大学数学科を勧められたんです。当時理系は花形でしたが、自分には数学の才能がまるでないことが分かっていたので、行きませんでした。なぜ分かったかというと、附属明石中学は実験校で、教科書にない集合を一年の時に、推論を二年の時に教えられたんですけど、私はさっぱりだったのに、完全に理解している同級生——彼は東大の数学科に行きました——がいたからです。たまたま附属明石中学に行ったから道を誤らずに済んだわけで、本当にラッキーだったと思います。

—— その後、神戸大学の法学部に進学されたんですけども。初めから法曹界を目指していたわけではないように伺っていますけれども。

佐々木 全然なかったですね。家系には医者もいないくらいで、まして法律家など皆無。そういう職業があるという認識すらありませんでした。

母は女医に憧れていて、私を女医にさせたがりましたが、私は血を見るのが怖いし、と言うと精神科医なら血を見なくていい

よ、これから精神科が花形になるよと。でも大学では解剖とか避けて通れないので、やっぱりハードルが高いなと。結局三年時に、思い切って文系コースに変わりました。後の話になります。司法解剖の立ち会いが平気だったので、もしかしたら医者も大丈夫だったかとも思いました(笑)。

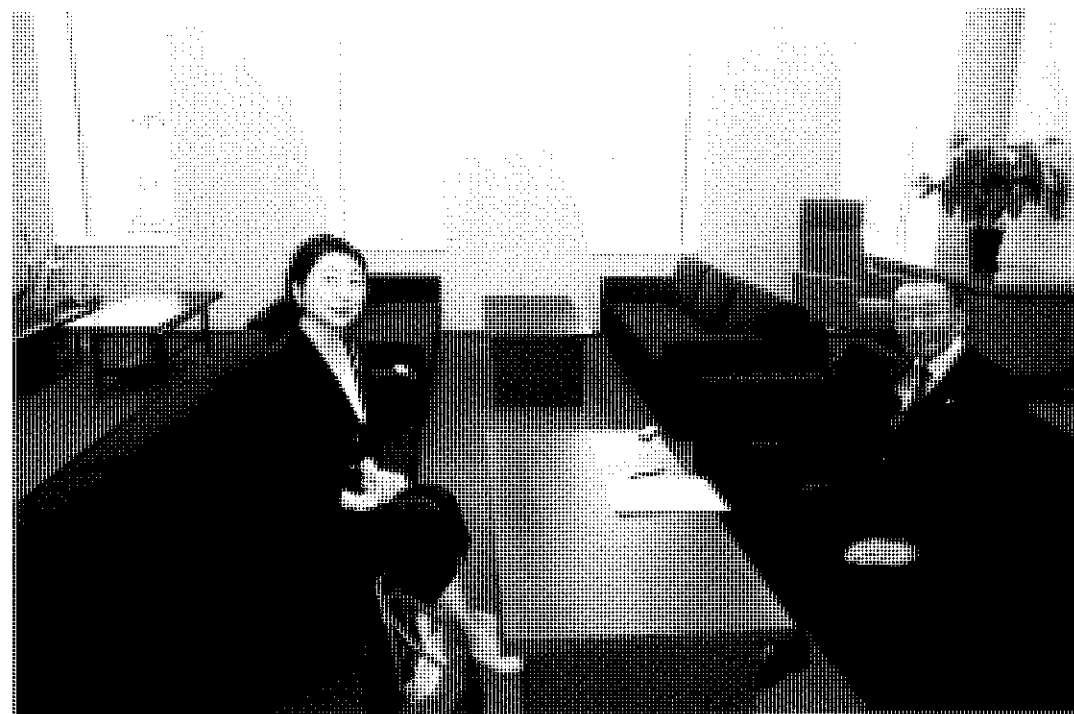
文系コースに変わったんですが、何になりたいという目標はなかったんです。ただ、職業は必ず持とうと決めていました。当時、鳥飼玖美子さんの同時通訳がブームで、英語は大好きだったので、大阪外国語大学の英米科を受験しよう。当時は二期校だったんですが、そちらが第一志望で、一期校の神戸大学が滑り止め。偏差値は英米科のほうが高かったんですよ。

学部はどうしようと考えて、文学部だと教師だろうけど教師はちょっと、経済や経営はあまり興味がないし、じゃ法学部だよね、法学部は潰しが利くというし、職業はあとで考えようという感じで法学部にしました。それで第一志望の大学に二時間もかけて母と見に行ったら、えっと思うほどキャンパスが小さくて散らかっていて、正直本当にかっかりでした。

—— まだ学生運動が盛んなころでしたね。

佐々木 そうですね、たぶんそのせいだったのかもしれない。それでとたんに行く気がなくなって、二期の志望校を神戸市立外国語大学に変えたのです。神戸大学法学部に合格した後、そちらをまた受けるかというと、市立だし、モチベーションがぐっと落ちて、結局大学受験は一回だけでした。

—— それで法学部に入った後、職業をどうしようかと?



中島啓雄先生と対談 (18.9.11)



ピアノはずっと続けている。  
 (中学2年の発表会 曲目はベートーベンのソナタ)



自転車通学に備えて乗り方の練習  
 (小学校6年)

佐々木 いろいろ考えました。新聞記者とか外交官とか。NHKのアナウンサーになるかと思って行ったら、関西弁なので「よほどコネがないと無理ですよ」って(笑)。公務員は堅実だけ面白くないし、じゃあ会社かというと、女性には全くと言っていいほど就職案内が来なかった。

—— 女性枠がないんだ。

佐々木 ないんですよ、もちろん総合職などなかったし。どうしたらいいのかと思っていて、司法試験は大学で受ける人も少ないし、通る人も年に五人いるかいないかだったんで、現実感がなかったんです。けれどたまたま電車で隣り合わせた民法の教授から、私の物権法の答案が非常によく出来ていた、「あれだけ書いたら必ず通りますよ。私が見込んで通らなかったのは一人もいない」と言われて、半信半疑で勉強を始めたという感じでした。

物権法の成績は優でしたが、あっさり一通り書いただけで、それほどよく出来たとも思えなかった。結局、司法試験というのは、基本的なことが理解されていて、論理的に書ける力があればよく、そんなに難しいものではないんです。

—— 英検一級は大学生になってからですか。

佐々木 大学三年のときです、ESSクラブにいたので。英検一級は結構難しく、合格率は全体で5%程度。ESSでも合格した人は本当に少なかったですね。

—— 御卒業後、明石市役所に一時勤められたと伺っていますけれども。

佐々木 ええ。そのころ神戸大学法学部で他の大学に做って答案

練習会というのが出来て、自分で言うのも何ですけど論文はよく書いて、すぐに通ると言われたんです。でも論文式を受けさせてもらうためには短答式というのに通らなくちゃいけない。私、昔からマル・バツ式が嫌いというか、短答式の過去の問題を反復練習しないと行けないと言われたんだけど、そういうのは邪道だろうと思った。で、やらなかったら、短答式で続けて落とされて、

—— 肝心の論文試験を受けさせてもらえない。

もう、しようがないし、何かしら働こうと考えて、裁判所の書記官と明石市役所、二つ受けて、どちらも倍率は非常に高かったんですけど、通りました。まあ、近いし、この際地方公務員を知っているのも悪くないと思って明石市役所に入って、一年いたんですけど、いい勉強にはなりませんが、ずっといようとは全く思わなかったですね。

それで辞めて、四月から背水の陣で、初めて短答式の過去問題を片っ端からやって、そしたら五月の短答式試験はとても簡単に解けました。

—— テクニクがちよつと足らなかった。

佐々木 テクニクですね。解答時間も無いし、いちいち考えていたら駄目なんです。反射神経で解かないといけない。やってみたらあつけないほど簡単だったのに、何年か無駄にしたなと悔しかった。そのあと論文は当たり前のように合格して、二週間にわたる秋の口頭試験も通って、その年で受験は終わりました。

—— 無事司法試験に合格された。

佐々木 そうです。ただそのときはまだ検事になろうとは全く

思っていなかったです。

—— そこですよ。女性の検事はまだまだ少ない。裁判官はかなりおられたかもしれませんが。

佐々木 司法試験に合格すると、弁護士か裁判官か検事ですよ。私の選択としては裁判官か弁護士か、でした。

私、今も家庭裁判所で調停委員をやっていますけども、割と身近な家庭問題や少年問題が好きで、裁判官の中でも家裁の裁判官というのが具体的なイメージとしてありました。次に弁護士。検事は全く選択肢になかった。

だって、大学の刑事訴訟法の講義なんて、検察をめちゃくちゃ悪く教えるんですよ。うちの先生は中でも特別だったかもしれないけど、無辜の者をなんとかして有罪にするのが検察で、救うのが弁護士。検事に対して悪い印象を持っていた修習生、多かったです。

ところが、配属地の神戸で検察修習に行ったら、検事の皆さんとっても人間的で温かく、鬼検事のイメージなんかどこにもない。被疑者を調べるとき、「君、いつまでもこんなことをやっていてどうするの。親だつて悲しむ。いい加減立ち直らない」ととか、警察官もそうなんです。検事もすごく親身になって調べている。

—— へえ、そうなんです。

佐々木 ええ、何より感心したのは、私が殺人事件の被疑者を取調べさせてもらったときのことです。今では嘘のような話ですが、当時は、指導係検事に配点になった事件を、被疑者の許可を

取って修習生が調べていたんです。夫が浮気をしたと思込んだ妻が、赤ん坊を道連れに電車に飛び込み、無理心中を図った。子どもは電車に轢過されて死に、自分だけは咄嗟に身を庇って助かった殺人事件。私にはなんと軽率な身勝手な犯行だろうと思えなかったんですが、指導係検事は、妻の悪いことばかりか、夫の悪いこと、つまり被疑者にとって良い状況まで丹念に調べたのです。

「それって彼女の弁護人がやればいいことじゃないですか。検察が何でそんなことまで調べるんですか」と言ったら、きつとして言われた。「検察は公益の代表者だ。だから、いいことも悪いことも、調べられるものはなんでも調べるんだ」。へえと思つて、まさに目からうろこ、大学の講義で教えられていたのとえらい違いなんです。皆さん、本当に親身になってやっておられた。

—— それで検事になった。

佐々木 取調べがうまい、検事に向いているからならいかとスカウトされて、たしかに性格的に向いているというのはあつたかもしれないませんが、当時、過酷な労働条件で検察官のなり手が少なかった、今はずつと待遇は改善されています。

給料も少なかったけど、東京から松山に転勤して、引越し手当が七万円しか出なかった。私は四トンロングで運ぶほど当時から衣服がたくさんあって、何日かホテルに泊まるし、母にも手伝いに来てもらうし……。

—— 転勤手当が七万円。

佐々木 ひどいでしょ。私はピアノまで持ち運んでいたから、

何十万円もの大赤字。そういう過酷な労働条件で、宿舍は古くて汚くて、シャワーもない。だからか、検事のなり手が減っていて、とにかくなくなってくれというのがありましたね。

任官した昭和五八年に五十三人入って、うち女性は二人。もうちょっとしてから少し増えてきましたけど、本当に毎年一人とか二人。私の検事バッジ、女性用のバッジがP28、つまり女性検事歴代二十八番目なんですね。何で女性は別に番号が付いているんだ。もちろん、それもあるんですけど、女性は安全ピンで男性の背広用とは形状が違うんです。でも二十八人なんか全然なくて、上の人はもう辞めているし、実際にいる女性検事は全国でも数えるほどでした。

——じゃあ、珍しがられて当然ですよ。

佐々木 東京地検にまず配属になって、翌年新任明けで松山に行ったときにはすごかったです。四国初の女性検事だったんで、どこに行っても、「何で女性なのに検事になったんですか」、決まり切った質問を毎回毎回どこに行っても受けていた。もちろん、今はそんなこと全然ないですけど、当時は珍しかったので。

スカウトのとき、とにかくなくなってくれと。弁護士から裁判官や検事にはなれないけど、弁護士にはいつでもなれる。検事になったら行政庁への出向もあるし、私は英語が好きなんですけど、アジア極東犯罪防止研修所といった所にも行ける。それは貴女にとつていい経験になる。「嫌だったら半年で辞めてもらってもいいんだよ」なんて、これは自分たちのスカウト実績ですね(笑)。

——なるほど。

事はそれぞれ二人出してもらえて、裁判官は一人かな。

——あとは全部ほかの国ですか、東南アジアとか。

佐々木 保護観察官とか刑務官、海上保安官とか警察キャリアとか。あとは各国から。発展途上国ですよ、JICAベースなので。ヨーロッパからは、先生では来ますけど、研修員として来るのは基本的にアジア、中東、アフリカ。中南米もたまに来ますが、スペイン語しかできない人がいて、意思疎通が大変でした。中国、韓国も毎回来ていましたね。

当時いろんなカルチャーショックとか、中東はもちろんですが、アジアもアフリカもイスラムの人が多いでしょう。彼らと付き合っ、私もイスラムの本とかも随分読んで、ある程度の知識が出来たのはよかったですね。

——そこでのいろいろ経験されたことが「日本の司法文化」というご著書になって、日本の司法文化というより比較司法文化論みたいで、非常に興味深く読ませていただきました。やっぱり、司法制度というのは各国によって違うんですね。

佐々木 本当に違いますよね。日本の人は、弁護士会でも何でも、「外国では」とか言うんですけど、大抵欧米を向いているんですね。でも、そんなふうには一概には言えないだろうと思う。アジアにはアジアの文化圏がありますからね。仏教の因果応報とか、キリスト教とは違うメンタリティーがあります。

まあ、国会の時にもよく思いました。会計基準にしても何にしても、すぐに先進国はこうだとか言う傾向がありますよね。例えば死刑廃止、向こうではそうなっているからと。でも、日本は死

佐々木 でも、実際になってみると、とても居心地が良くて、上の人に対しても物を言える組織なんです。今もそうかどうかは分かりませんが。配点を受けた事件については、主任は私、被疑者を一番知っているのは私という誇りを持って、釈放か否か、起訴か不起訴か、罪名・公訴事実をどうするか、求刑をどうするか、上司と真剣にやり合いました。

「私は罰金で済ませるべきだと思います」と、「いや、俺は絶対公判請求だと思おう」。私が折れなかつたら、「じゃ、次席検事、検事正に聞いてきてごらん」。それを当時の検事正が覚えていて、この前の話の中で、「佐々木さん、自説を譲らなくて大したもんだった」と。私のほうは言われて思い出したくらい、そんな些細なことを覚えていてくれたんだとびっくりしました。たぶんそういう検事が珍しかったんでしょうね。

——それで、佐々木説が通ったんですか。

佐々木 細かいことは覚えていないんですが、結局は自説を引つ込めたような気がします。あちらは膨大な実務経験に基づいて言われていることなので。それでもきちんと自説を持って主張するのを許容し評価してくれる、そんなおらかなムードが当時の検察にはありました。

——検事になられているいろいろエピソードもあるんでしょうけれども、特にアジア研ですか、国連アジア極東犯罪防止研修所、そこで研修生と教官と両方された。研修生というのは、やっぱり希望した人ですか。

佐々木 希望もあります。当時、春と秋、各三か月の研修で、検



アジア研教官時代(96年3月) フィジーを訪問  
衣装は検事総長(女性)からのプレゼント



アジ研教官時代(96年3月) フィジーの離島で  
衣装は島民からのプレゼント

刑を廃止できないと思います。やっぱり国それぞれにいろいろな歴史的文化的な背景があるじゃないですか。それを見ずに、先進国では廃止している、だから日本もって、それは違うだろうと思いますね。

—— 何でも欧米主導型という傾向が強いですからね。

佐々木 すごく強いですね。国会議員の方でも、「アメリカに留学してきた」「アメリカでは」とか言っていて、たしかにアメリカはそうかもしれないけれど、それだって州毎に異なったり、人種や宗教や政治的立場によって違ったりして一筋縄ではいかないでしょう。そもそも日本とは国の成り立ちが違う。もし日本がどうしても欧米の先進国と比べたいというのなら、フランスやドイツでしょうね。

—— 検事として忙しい中に小説を何冊か書いたというのは、そういうことを余技でやりたいということでは始められたんですか。

佐々木 当時、小説をすごく書きたいムードが自分の中にありました。ミステリーが特別好きというわけではないんですが、犯罪物だったら、知っていることなので、それほど取材が要らなくて。

書いていって、創作するって、すごくいいんです。多分、脳みそのどこか、いつもの仕事では使っていないところを使うみたいな、強いカタルシスとか充実感があって、日が暮れるのも、夜が明けるのも本当に分らないぐらい集中して没頭できる。

まあ、昔から文学作品というのは好きで、例えば「ジェーン・

エア」にしても「嵐が丘」にしても、途中で止められない、で気が付いたら朝だったみたい。あれで目が悪くなりましたね。

—— じゃ、書くのも昔から早かったですね。

佐々木 ええ、早いですね。仕事でも内容証明や準備書面の起案は早いし、礼状を書くのも早いです。ただ最近パソコン一辺倒なので、字がだんだん汚くなって、手紙を書くのが面倒になってきました。

—— 「悉文」などを読ませていただくと、やっぱり女性の心理をうまく捕えておられるなど。ミステリーというののかがどうかよく分からないけれども、なかなかこれは面白い。

佐々木 ありがとうございます。人間のストリーというか、心理小説のようなのが一番好きですね。

検事って死体解剖の立ち会いに行くんですよ。三十体ぐらいは行ったと思うんですけど、最初が検察修習の時で、絶対に嫌だと言うのに、指導係検事が、行かないと単位をやらない、隅っこにいて見なくていいから、と説得されて、本当に嫌々行きました。そうしたら結局、私と元獣医の女性だけが近くに行つてのぞき込んでいて、男性はみな隅っこに固まっていました。

忘れもしない光景ですが、四十二歳のやくざ、頭を一発ズドンとやられただけで、体には傷がなく、ぜい肉もなかった。医者が体の内部から何かを手持ったと思つたら、ぱりっと思がした。

「何ですか」と聞いたら、「血管ですよ。動脈硬化を起こしている。やられてなくても、あと二年……」。動脈硬化というと肥満体のイメージですが、それはリスクファクターでしかないそうで

す。

検察にいと、常に死とか死体とかが身近にあります。本人はいくら生きたいと切望していても、偶然の事件や事故によって一瞬のうちに命を奪われてしまう。誰も自分の寿命が一気に断たれてしまうことなど想像もしない。朝起きて、その日はもちろん、ずっとこの後も生きていくことを、当たり前にも思っている。でも冷酷な現実を目の当たりにすると、人は自分の意思の力で生きていくのではなく、他の大いなる意思によって生かされているのではないか。生きている間は、命を与えられていることに感謝し、人のためになることをしなければ、そんなことを思います。

—— なるほど、得難い経験をされましたね。

佐々木 ええ、興味深い話がたくさんあります。東京は監察医務院というのがあって別途ありますけど、地方は国立大学の医学部に法医学教室があってそこで解剖をするんです。松山地検時代の法医学教授は、変人で知られていたんですけれども、司法解剖が何より好きで、奥さんが助手。変死体が見付かると、「先生は朝からるんるんしている」。普通、一体二時間なのに、その先生にかかったら、最低五時間です。

生まれてすぐの赤ん坊の時には、こんなに小さいんだから解剖もすぐに終わるだろうと思つたのが大間違い、なんと八時間かかりました。で結局死因は不明、乳幼児突然死症候群(SIDS)ということでした。

胃の中の内容物によつて食後何時間か、つまり犯行時間の目安がつかます。先生が「肉、ねぎ、豆腐、これは何や」。奥さんが

すかさず「すぎ焼きですね」。

放火の事件の司法解剖で、何が一番大事に分かりますか。

—— 失火か放火かですか。

**佐々木** 放火か失火かは火をつけたのが故意か過失かだから、それは死体からは分からないですけど、大事なポイントは、死後に焼かれたのか、生存中に煙に巻かれて死んだのか。殺した後に証拠隠滅で放火をした場合には、煤を吸えない。そうではなく生きていたのだったら、気管支に煤があります。

アパートから九人の焼死体が出た事件では、真つ黒焦げで性別も何も分からない。二階と三階から各一を選び出しての死体解剖が始まったときは、もう夜でした。二体あるので、助手と手分けしてやってくれると思っていたのに、先生は年上から先にといい、一体が終わったときにはすでに深夜でした。みな夕食も食べていないので、警察の人たちと食べに出、「検事さん、何を食べますか」と言うので、「焼肉が食べたい」と言ったら、ものすごく驚かれた。「それだけは勘弁してください。私らはもうお茶漬けしか食べられません」。そう言われると、焼死体特有の燻製の臭いが残っていました。実際しばらくは燻製を見る度に思い出しました。

—— じゃやっぱり医者になれましたね。

**佐々木** たしかに。でも、医者じゃなくて検事で良かったなと思いました。だって、医者だと基本的に病院にいるけれど、検事は裁判所に行くし警察に行く。現場にも行く。海上保安庁とか税務署とか、いろいろな関係機関があるから、行く所がたくさんある

んです。

地方だと検事正と地裁所長と知事、三人がトップなんですよ。検事正に「佐々木さん、替わりに行ってください」と言われて行ったら、隣は知事だったことがありました。向こうにしたら、何でもこんなペーペーが来たんや、馬鹿にしとんかと思ったかもしれないけど、私はいろんな話をして、場数を踏むというか、貴重な経験になりました。

—— 検事ですと、別の行政機関にも行けますしね。

**佐々木** ええ、それは純粹の司法である裁判官より遙かに幅が広いんです。例えばさつきから言っているアジ研に行けたし、それから国の代理人である訟務検事もやらせてもらいました。

名古屋法務局付訟務検事二年の間に、例えば、予防接種禍訴訟、スモン訴訟、小松基地騒音差止め訴訟、税金訴訟、各種行政訴訟、国家賠償訴訟、国公立病院が訴えられる医療過誤訴訟等々、多くの案件を扱いました。訴訟には各省庁の担当官が就くし、厚労省の医者にもいろいろ聞きました。弁護士になって、この経験は大いに役立っています。もちろん当時はいつか弁護士にと思っていたわけではないのですが。

管轄が愛知のほか岐阜、三重、富山、石川、福井と広いので、しょっちゅう裁判や打ち合わせに出かけていて、各地の美味しい物も食べたし、裁判のついでに「越中おわらの風の盆」も見ました。風光明媚な高山線の「ワイドビューひだ」、また乗りたいのですが、あれは日本有数の車窓風景だろうと思います。まさに役得で、給料貰って勉強させてもらい、なおかつ楽しませてもらっ

て、申し訳ないなあと思うくらいです。

—— あちこち転勤されたんですよね。

**佐々木** 東京に始まって松山、横浜、津、名古屋で後はずっと東京、計十五年でした。裁判官に比べると検事の転勤サイクルは早くて、二年から三年。引越しや異動は大変といえは大変ですけど、ついでに風光明媚な所に行けるし、グルメも出来るし友達も出来るし、その交流が今も続いているし、いいですよ。だんだん年を取ってくると面倒になります、若い時の転勤はメリットのほうが大きいと思っています。

その点、弁護士はずっと同じ所にいますよね。事務所が変えられるくらいで。弁護士の友人から言われて、なるほどと思ったのですが、検事も裁判官も転勤の時に、それまで抱えていた嫌な事件も嫌な人もシャッフルできて羨ましいと。

—— でも検察官や裁判官だと結構付き合いなにか窮屈だったりしませんか。

**佐々木** ええ、それはありますね。地方は狭いので、裁判官も検事も結構周りに知られていて、自由な行動が出来にくい。警察からやぐざ関係の店リストを渡されていて、もちろん行ってはいけません。我々が飲みに行ける店も決まっています、行くとき身内ばかりで、本当につまらない。検事でも、ことに地方では窮屈さを感じていたので、裁判官の場合もつとでしょう。

—— 飲みに行く店も決まっていますとは、初めて知りました。

**佐々木** ええ、特別な公務員なので、やはりいろいろと不自由ですよね。国会議員を辞めて弁護士になって十四年余、何が嬉しい

とあって、自由なのが一番嬉しいんです。反対に、自由人から公務員になるのはちよつと無理だなと。

飲んべえの先輩検事が、あるスナックを気に入って通い詰め、後輩を連れて行ったりしていたのですが、一人一律三千円、おそらくは検察関係者だから優遇したのでしょう。ママは服役中の某組長の情人で禁止リストに入っている店と判明し、検事正からこつぴどく怒られていました。

—— 佐々木先生もあまり飲みに行けなかったとは想像がしにくい。

**佐々木** 余り大きな声では言えませんが、私の場合は実はそうでもなかったんです。珍しい女性検事だったこともあり、県警本部長以下警察幹部たちからよくお声がかかっていました。津にいたときは、大門に店が百五十軒あるそうですが、二年でその半分くらい行ったかもしれない。男性の検事は同じ店ばかり行っていて、せいぜい五、六軒、逆差別だと怒っていました(笑)。

—— 警察と検察官って意外に親しいんですね。

**佐々木** 一緒に飲むことは別として、仕事上でも警察は事件を検察に送致しないといけないので、事件相談によく来るんですよ。立件したら検察は受けてくれるのか。逮捕したのはよいけれど、これは犯罪になりませんかと言われて釈放なんてことになったら、目も当てられません。

多分日本で初めて不法就労助長罪を起訴したのは私だと思うんですが、その罪が出入国管理及び難民認定法に入っただけのと、警察が相談に来たので、ゴーサインを出しました。すると安

心して、事件の送致段階で「佐々木検事と相談済み」と記載してくるので、私が主任検事です。

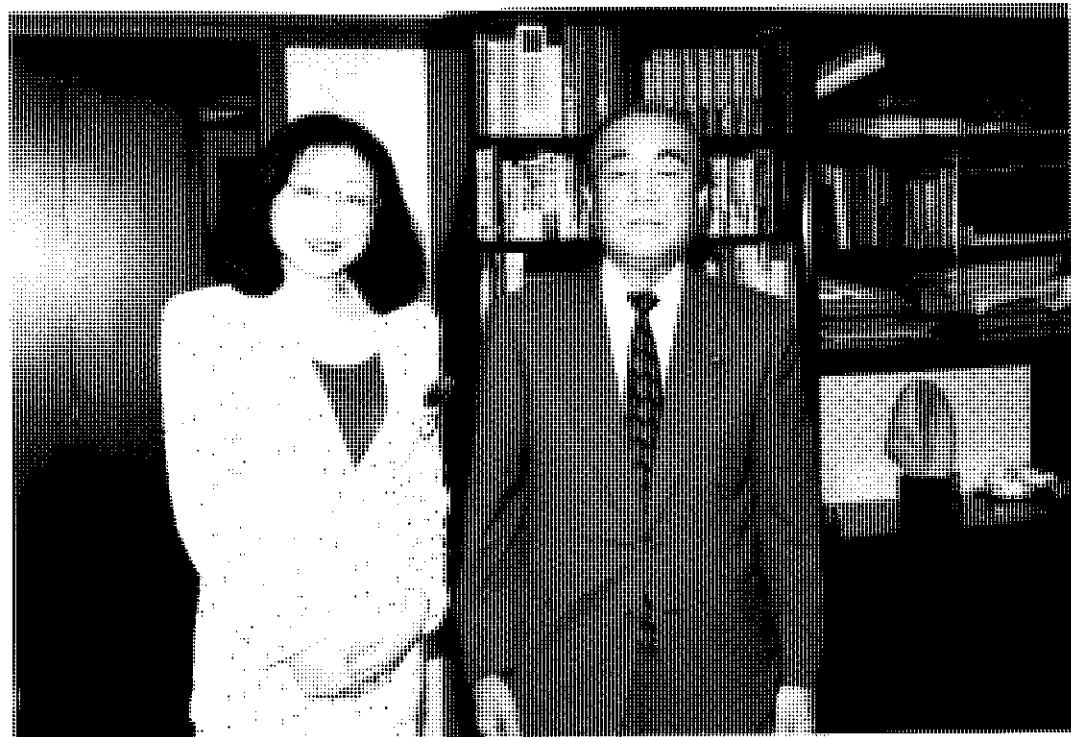
具体的な事件処理だけではなく、検事は警察によく研修講師で出かけます。講師指定がないときには次席検事が派遣検事を決めますが、〇〇検事希望と書いてあるときにはその検事です。私の場合は夕方の時間指定までであり、そのあと一緒に飲むことになっていました(笑)。

—— 例えばどんな内容の講義をされたのですか？

佐々木 三重県警での「外国人捜査について」の講義はよく覚えていますが。最初受講者は十五人位の予定だったのに、行ってみると五十人近くいたので。「せっかく佐々木検事が来られるので、手すきの者はみな集まりましょう」ということだったらしい。帰って報告すると、検事正が次席検事に、「大したもんな。わしらが行ったら、何か用が入った言うて、十五人より少ななつとったで」と。任期最後のときは、「交通事犯の捜査について」の講演依頼で、県警に行ったら、果ては熊野まで各警察署から人が集まり、講堂一杯二百人の受講者でした。

—— それは、やっぱり国会議員になる素質がかなりあったんじゃないですか。なぜ国会議員に立候補されたんですか。そろそろその辺をお聞きしたいと思います。

佐々木 当時の総理枠で入ったんですね。橋龍さんのときでした。一位の有馬さんは決まっていたけど、女性候補が決まらなかった。女性検事がいいやないかということになって、村上正邦さんたちが……



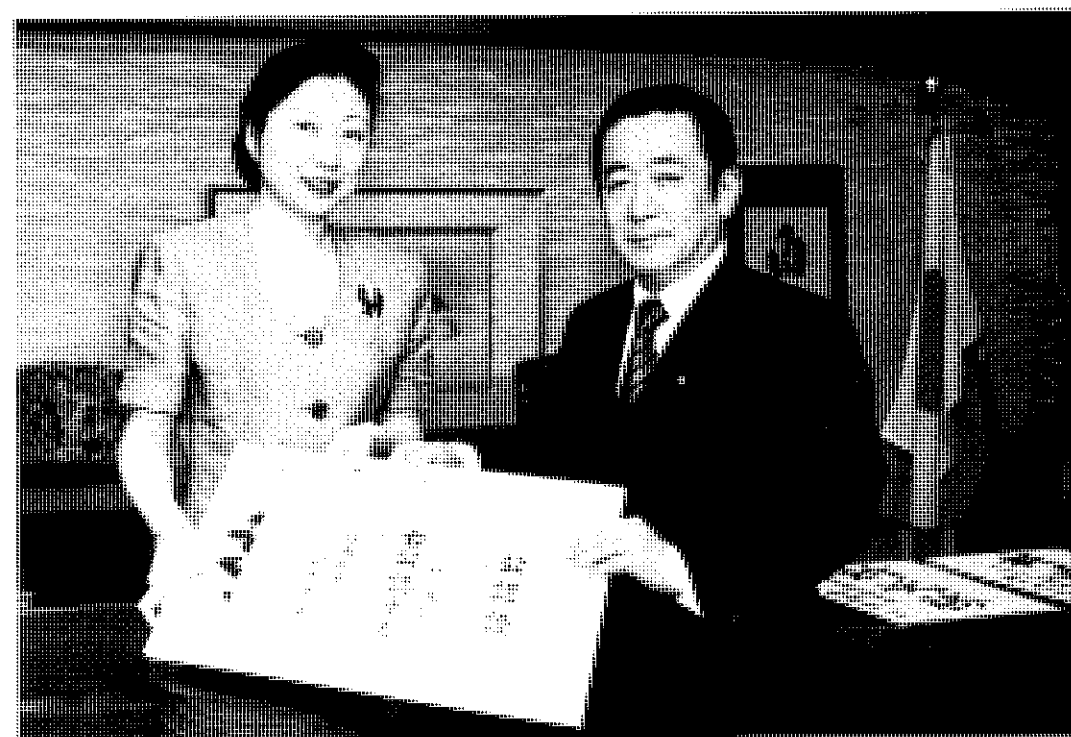
立候補が決まり、中曽根元総理に面会 ('98年 5月)

—— 随分検事がいろんなところでもてはやされた時期と大体一致しているんですね。ロッキードはちょっと前だけど、やっぱりそういう企業の不正事件だとか何とかというのがある。割と検事経験者がいるんな委員会なり社外取締役に……

佐々木 そうですね、例えば証券取引等監視委員会の委員長以下は検事だし、社外取締役はどなたか元検事高官がなったんです。うか。

とにかくはドラマの影響でしょうね。霞天子シリーズとか。以前は総理枠はずっとスポーツ選手でした。誰がいいかと法務省の上の人に話を持っていった、ヤメ検じゃなく現職がほしいと。じゃ、うちから出せるのは佐々木知子ぐらいやないか、社交的やし適応性あるしとか。で、にわかには話が来たんです。

私は当時、東京地検公判部の大きい部屋だった第二検察官室の部屋長(キャップ)をしていて、仕事も充実してとても楽しかったし、第一、これで辞めたら検事に戻れないじゃないですか。だからお断りもし躊躇したんですけど、最後にはまあいいかということになって。ヤメ検から国会議員になった人は何人かいるけれど、現職検事から直接というのは私が初めてでした。平成一〇年五月に辞めて、七月に国会議員。



橋本総理から公認証を頂く ('98年 6月)



初めての選挙戦 与謝野先生撮影（'98年6月）

—— 余り論理的思考じゃないと言ったら悪いのかもしれないけどね。

佐々木 こんなふうに来上がったものを、現場の法律家はああでもない、こうでもないと言ってたんだという感じでしたが、でも、とても楽しかったですよ、本当に。六年が長過ぎるということもなく、短過ぎるということもなく。

私、少年法の改正とかストーカー規制法の制定とか、特に少年法にはすごい興味があって、いろいろな少年事件を扱ってましたしね。大事な改正に携われたのはとてもいい思い出になります。

最初は希望して外交防衛委員会の所属だったんですが、国会議員になってすぐ、通信傍受法その他重要法案での徹夜国会があったりして、法務委員会の係属案件がすごく増えていたんです。参議院自民党には法律家がない、他の党には揃っているのに。だから私、頼まれて法務委員会にも行って質問をするという掛け持ちになり、大変だったので、結局法務委員会専属になりました。

最後一年は厚生労働の政務官をやったので厚生労働委員会所属でした。その六年間に、刑事も民事も改正や制定など重要な法案が通って、そのストックがあったので、弁護士になったときはかなり楽でした。あ、この改正知っている、この質問したのは与党委員の私だと。

—— 制定の経緯をよく知っておられる。

佐々木 そうそう。部会的时候会に「これおかしい」とか、いろいろ言ったやつだよなとかいう感じでした。

—— 例の「日本の司法文化」というのは、その間に書かれたわけですか。

佐々木 ええ、たまたま話があったので。今はもっと詳しく書けると思いますけど、当時分かってた範囲内で書きました。

—— でも、それも、やっぱりいろいろ根拠を調べたりするのは大変だったでしょうね、うそを書くわけにいかないから。

佐々木 大変でした。中島先生みたいにドイツ語もできたら原典に当たれますけど、英語をちよつとしか当たっていない。でも、英語でも難しいですよ。アメリカは各州で違うし、法体系そのものが大陸法と英米法では違うので、概念や言葉使いが違う。英米法は余り法律に拠らずにコモン・ローの国だから、裁判でどこまでが射程範囲かというところがありますから。

—— 法律の文章って、独特だから、日本語も読みにくいけれども、英語もフランス語もドイツ語も読みにくい。

佐々木 そうですよ。同じ言葉でも意味が違うじゃないですか。一般用語と使い方が違う。英語が出来たら英語の契約書が読めたり書けたりするかって、まさか、それは全然違いますよね。日本語が出来たら、日本の法律が分かるかという、そうじゃないのと同じように。でも書くことは頭の整理になるので、書いてよかったです。

—— 海外にも随分おいでになったんでしょけれども、そのときの思い出とかありますか。

佐々木 国会議員のときに台湾、韓国、アメリカ、フランス、インドネシア、パキスタン、トルコ、オーストラリア、ボリビア、

キューバ、メキシコなど行かせて戴きましたが、検事時代も国連犯罪防止機関のあるウィーンに毎四月、犯罪防止会議でエジプト、研修実施でベトナム、フィジー、コスタリカ、マレーシアなどに行きました。中で最も強烈な思い出を一つ挙げると、サウジアラビアのリヤドです。

届いたビザはイスラム暦でした。真夜中に空港に着いたら、バコンクでの乗換え時にはたくさんいたミニスカート姿がおらず、黒一色です。鞆の中を徹底的に調べるので長蛇の列が進まない中、私は公用だったのでそれほどはかからず、ほっとしました。

迎えの大使館の人が、黒服（アバヤ）を持ってきてくれていました。外国人なので顔は覆わず、首から下だけの黒服、袖のない裁判官の法服みたいなものです。「外出の時には必ずこれを着てください」と。私にびびりたっていたので聞いたら、私の身長を聞いてあつらえた日本製だと。日本の女性は私が二人目、最初は一五〇センチの女医さんだった、私専用なのでどうぞ帰国時お持ち帰り下さいと言われたけれど、着る所がないので置いて帰りました。

—— で、サウジでそのアバヤを着たのですか？

佐々木 外に出るときは着ていました。一度、会議の後に誘われて、着ないまま長いスカート丈のスーツで市場に行ったら、後ろから聞こえた日本語が「危ないよ、そんな格好をしていたら。警察に捕まるよ」。振り返ったら外国人で、話をしたら、日本の基地によく来ていたというアメリカ人でした。「ここは全然いいところじゃないよ」。お酒も一切飲めないですしね。大使館では飲





日パ議連でパキスタンを訪問（02年4月）



李登輝総統の私邸にて（02年8月）

めるんですが、大使館ですら空き瓶は割って出すそうなので、他のイスラム国とも違います。最も戒律が厳しく、自由のない国です。

どの女性も目だけ出した黒服を着ているのですが、市場ではパリで売っているような洋服とかもたくさん置いてあるんです。貴金屬も二二金で、目映いばかりのものがものすごい量売られていて、私もいくつか買ってきました。洋服をどこで着るのかというと、家でパーティーをするときに着るんだそうです。

—— おしゃれ服は家の中で。  
佐々木 家の中専用なんですよ。外に出るときにはアバヤが必須。

男女は完全隔離だから、レストランでも同席不可、結婚式も別々にやるんだそう。顔を見せていい男性は父親や夫、家族だけ。パーティーは女性だけが集まってやり、そのときは無茶苦茶派手な格好をする。だけど、今はサウジアラビアもそれなりに変わってきましたよね。

—— そうですね。運転免許も解禁になったり。  
佐々木 そう、それが最近のことなので、運転免許は女性にはずっとなかった。国王の妻が誰でどんな顔をしているのか、誰も知らない。

既婚女性が夫以外の男性が運転する車の助手席に座っていたら、即姦通罪で処刑ですよ。もともと国の名前がサウジ家のアラビア、憲法もなければ議会もない。拷問は日常茶飯で、表現の自由など一切ない。

サウジアラビアで一番過ごしやすいと言われる一月に行ったんですけど、その一月でも、一日の間にゼロ度から三十度になる。だから、夜は暖炉が要るし、昼間は暑くて。ビールが欲しくても飲めません。

—— 夏と冬が一日の間にあると。

佐々木 砂質の土地にいろいろな植物を植えていて、石油よりも高いと言われる水をずっとスプリングラーでまきまくっている。何とせいたくなんだろうという感じでした。砂漠にサウジの人たちと一緒に登りました。

大使館でもサウジの人は雇わず、会議・宿泊施設の労働者もタイとかフィリピンとか出稼ぎの人ばかりでした。

—— そういう人が労働者として来ているんですね。  
佐々木 そうなんです、労働は外国人が担い、サウジの人たちは働かない。ずっとお祈りをしている。石油が出る間には国はお金持ちでそれでもいいんですけど、石油はいずれ枯渇します。そのときはどうするの、と心配するのは周りだけで、彼ら自身はそうなら砂漠の民に戻るだけと至って気楽な様子です。

私なんか、フィリピンの労働者から、「マダム。ここは全然いい国じゃない。私は日本に行きたい」とか言われて、ちよつと怖くなって、意味が分からない振りをしてました。いろいろありましたね。

—— 参議院でのお話を伺いたいと思うんですけども、選択的夫婦別姓とか、いろいろ佐々木先生が主導してやられたようですが。

佐々木 残念ですね、簡単な法案なのに。国の秩序が乱れる、家族制度が壊れるとか言って、自民党内で大反対のシユプレヒコールでした。そもそも同棲でいいのなら、姓の問題は起こらない。結婚して社会的に夫婦として認知されたいからこそ別姓を願うのだし。歴史的にも日本で平民に姓が認められたのは明治以降だし、武家では夫婦は別姓のままでした。

— そういわば形式的な法案が通らずに、その騒動を縫うようにして、性同一性障害者が戸籍上の性別を変えられる法案がすつと通りました。当事者の便宜を図るだけの簡単な内容でしたが、戸籍上男女の夫婦になって、養子ではなく、人工授精で作った場合、その子の法的地位はどうなるのかといったことは考慮の外でした。しかし実際にそういう事態が起こって裁判になり、子の嫡出性について、最高裁が、普通の夫婦同様嫡出推定が働くという、ちょっと奇妙な判決を出しました。元女性の父親が本当の父親でないことは誰が見ても分かるし、当の子供にもすぐには知れるのに。

— 人工授精や代理母など生殖医療が進んで、そうした親子問題は立法で解決すべきなのに、全く進まない。とにかく、結婚イコール同姓で例外は一切認めない、皆同じでなければいけないというのは、硬直すぎると思います。

— 何か男系社会第一みたいな考えがあるんですね。

佐々木 反対論者が言うには、これは女性差別ではない、男女はあくまで平等で、男が女の姓に変えてもよいのだからと。でも現実には夫の姓を取るカップルが九割で、半々にはならないです。

いずれにしろ結婚年齢が上がるにつれて、これまで社会的に認知されてきた姓を変える側は不自由さが増します。そのため、せっかく結婚をしたいのにできないカップルがいて、その人たちが晴れて結婚させてあげたい。少子化解消にも少しは役立つはず

— 中国なんかは別々なんですよものね。

佐々木 そうそう。それを言うと、韓国なんかは女性差別だから、家に入れてもらえないだけだからみたいなことを言う人がいるけど、だからどうなのって。欧米なんかは、ヒラリー・ロッドム・クリントンですか、自分のもともとの姓を入れたりしてね。

— そうですね。何かミドルネームでやっている。

佐々木 ファーストネームが主で、後幾ら付けてもいいという場合も。

— ミドルネームというのは、正式の場合と通称の場合と、いろいろあるんですか。

佐々木 あるんじゃないですか。どうなっているのかよく分かりません。本当に通称で付けているだけなのかもしれないし。

— 洗礼名は正式なんですか。

佐々木 どうなんでしょうね。基本的に、そんなに意味のある戸籍ってありませんか。教会に届けるんじゃないですか。

— 教会に届けるだけですかね。

佐々木 戸籍がきちりしているのは日本と韓国だけと聞いたことがありますが。

— 州によってもいろいろ違うしね。

佐々木 そうそう。松山に赴任したとき、道後で外国人が不法残留、オーバーステイイングですね。観光ビザで入国して、売春婦として働いていて、経営者は管理売春で捕まえた。フィリピン女性八人も全員逮捕して調べた。

— 指紋から前科は分かるので、不法残留歴がある者も何人かいる。すごいのは七回不法残留で強制送還されて、今回八回目。同じ名前では入国できないので、もちろんその度に別の名前です。偽造パスポートかもしれないけれど、当局に何か包むと、毎回適当に新規を出してもらえるのかもしれない。「あなた、本当の名前は何なの」と聞いたたら、「今回のです」としゃらつと。「じゃあまた、八回目になるまで本当の名前をわざわざ使わなかったわけ？」、皮肉っても通じない。

— ICP Oを通じて身元照会をしても、肝心の国の態勢がめちゃくちゃならどうしようもない。困るのは、本当の年齢が分からないうこと。二十歳未満だと少年法の適用を受けるので、家庭裁判所に送教しないといけない。名前よりもむしろ気に掛けました。

— じゃ、パスポートを見たって、必ずしも本当ではない。

佐々木 そうなんです。本人が、「パスポートにはそうなっているけど、私の生年月日は〇〇で、本当は十九歳」と言われてしまうと、適当に嘘言ってるやろか思っても、身柄を取っている二十日間ではICPO照会も間に合わない。で仕方なく、少年ということにして家裁に送りましたよ。

— フィリピン人はちよつとの間に日本語、うまくなりませんね。その点タイ人は駄目。日本と同じでずっと独立国だから、外国語に

弱い。アジ研修で一緒だったハーバード大卒タイ人裁判官も五年アメリカにいたというのが嘘のように、下手でした。

— フィリピンは、やっぱり英語もスペイン語も。

佐々木 スペイン語はやらないでしょうけど、共通語であるタガログ語のほかに英語も小学校から習うので、うまいです。不法残留初回で日本に三ヶ月いるだけでも、それなりに日本語を喋る。検事の私に、「先生」とか「マダム」とか、懸命に持ち上げようとしているのが伝わります。外国に来て、お金を稼いで国元に送る。フィリピンって男が働かない国だから、女性はとてたくましいですよ。

— それが昭和五九年で、外国人事件の出始めでした。県警は表彰を受け、警察と検察関係者で打ち上げパーティーをしました。初めて外国人を大量に捕まえたので、外国人捜査で苦労するところみたいな話をいくつか書きましたよ。

— 参議院も一期だけで弁護士に転進されてしまったんですけど、れども、その辺の御事情については。

佐々木 だって、前は総理枠で簡単に出入られたけど、選挙は大変じゃないですか。

— そうか。次は、党が順位を付けるんじゃないかと、例の得票数によって順位が決まる。

佐々木 そうそう。前の全国区式と変わらなくなった。それでも無理だと。それに、六年やって、こんなことを言ったら何ですが、大変貴重な経験もさせてもらえたし、辞めるときはまだ五十歳前だったので、今からなら転進が体力的にも楽だろうと思っ



総理官邸で（'02年9月）



厚労省政務官に就任（'03年9月）

た。

でも、それからあつという間で、もう十四年が経ち、来年で十五年。検事十五年余は、あちこち転動したし部署も違ったし、いろんなことがあります。この間に起こった有名な事件とか事故とか、あのとき私はどこにいたという記憶で暦が分かりますが、弁護士になって東京から出ないし事務所も同じ、ちなみに自宅も同じなので、変化がないです。

弁護士の方が言っていたとおり、付き合う人も同じ。もちろんそれなりの新陳代謝はあるけれど、大きくは変わらない。穏やかといえば穏やかな毎日です。行く所も大体、事務所から裁判所。地方の裁判所に行くこともありますが、仕事が終わるとすぐに東京に帰ってくるので、何か本当に十四年が「へえ」という、比重としては薄いですよ。

——それでも帝京大学教授をやられたり、これはやっぱりスカウトですか。

佐々木 ええ、亀井静香先生の大親友が帝京大学の前の沖永総長。帝京大学は、実学が大事だといって、官庁やマスコミ出身者、法律家の教員がたくさんいます。それも十三年、家庭裁判所の調停委員も十年になります。あ、変わったところでは帝京大学の柔道部の部長をしています。

——柔道をやられるんですか。

佐々木 まさか。やらないんですけど、最初は顧問に、そのうち何だかんだとグレードアップして、ついには女子柔道部ばかりか男子柔道部の部長兼任になりました。監督とかコーチは経験者し

か駄目だけど、部長は対外的な立場なので、別に必要ないそうですよ。大きな試合だったら武道館などに行きますね。この前は、横に、おつ格好いい男がいる、見たことがあると思ったら、井上康生だった。

——お相撲も好きでいらつしやる。

佐々木 好きですね。大相撲観戦歴も弁護士歴とほぼ同じ。両国国技館には毎場所行っています。この夏は猛暑の中、名古屋まで行ってきましたよ。

——それはそれは。蟲貞の力士は？

佐々木 稀勢の里です。いつもいつもこれぞというときに決まって負け、横綱はおるか優勝も遠いなど半ば諦めていたら、昨年初場所に初優勝、昇進した春場所で日馬富士から突き落とされて大怪我をしたのに強行出場した。照ノ富士相手に本割り、優勝決定戦と続けて勝って、まさかの優勝。その栄光と引き替えに体を壊し、連続八場所休場して、引退の瀬戸際で今場所出場しました。今のところ序盤三連勝、来週国技館に行きますが、そのときまでどうぞ引退はしないで。横綱土俵入りをこの目で見たいんです。

——やっぱり、昔の力は出ていないな。まだまだという感じですね。

佐々木 どたばたしていますよね。前は、左おっつけであつという間に勝ちましたけど、今はようやくやく何とかしのいで勝っている。横綱の勝ち方ではないですね。それでもとにかく今場所は勝ち越しをと。横綱なので、本当は十勝が最低ラインだと思いますけれど。

—— 趣味の方も多彩で、ピアノとかグルメとかファッション、お着物も、今日は洋装でおいでになりましたけど。

佐々木 着物はまだ暑くて着られないですね。十月になったらようやくでしょうか。今は単衣ですが、単衣でも暑いです。

着物は昔から好きで、何か行事の時は美容院で着せてもらい、そうでないときは自分で半幅帯や名古屋帯を適当に結んでいますが、六十歳になったら洋服から着物にシフトしようと考えて、そのためには自分で着られるようにならないといけない。五十八の時にネットで着付けの仕方を調べ、あとはまさに習うより馴れる、独学で場数を踏んで、一年経った頃にはわりとそれなりに着られるようになりました。

ところがこの恐ろしい暑さでは、着物は少なくとも夏は無理だと分かりました。となると、洋服との二重生活は変わらない。先日、いつも着物で行っていた行事に洋服で行ったら、「先生、脚長いんですね」って。やっぱり洋服には洋服の良さがありますね(笑)。

—— 着物のミニというのはいからね。

佐々木 ミニは国会議員のときは、たしかまだ穿いてましたよね。弁護士になってからミニどころかスカートもだんだん穿かなくなり、今やパンツばかり、動きが楽なので。というわけで、着物と洋服の二重生活になって、前よりずっと大変です。収納スペースには限りがあるし、体も一つなので、新しい物を買う傍から古い物を人にあげて、いわゆる総量規制をしているんですが、着物は着る人が少なくて。最近ようやく貰い先が少し見つかりました。

した。

—— でも、やっぱり楽しいんでしょうね、和服を着て出かけるというの。

佐々木 そうですね。皆さん、和服というだけでびっくりしてくるから。和服は、どんなドレスやスーツにも負けない、ものすごい文化伝統だと思います。

—— 男の方は、大体、黒いような背広しか着ないから。

佐々木 男の人は、かなりのインテリの方でも着物のことはご存じないですよ。訪問着も袖もよく分かっていない。

—— だって、自分の奥さんが着物を着ていたって、何着ているんだかよく覚えていない。

佐々木 前に藍大島を着て食事会に行ったら、主催者が「それが訪問着というやつですか?」。地味目の訪問着を着てパーティーに行ったら、「いや、素晴らしい大島ですね」。大島など袖は織りで、訪問着や留袖の染めの着物とは見た目も格も違うのですが、高いものイコール大島? 高価といえば大島より結城のほうが高価なんですけれど。

—— なるほど。議員を辞められてから「芍薬会」という佐々木先生を囲む会、小生も参加させていただいていますけれども……。

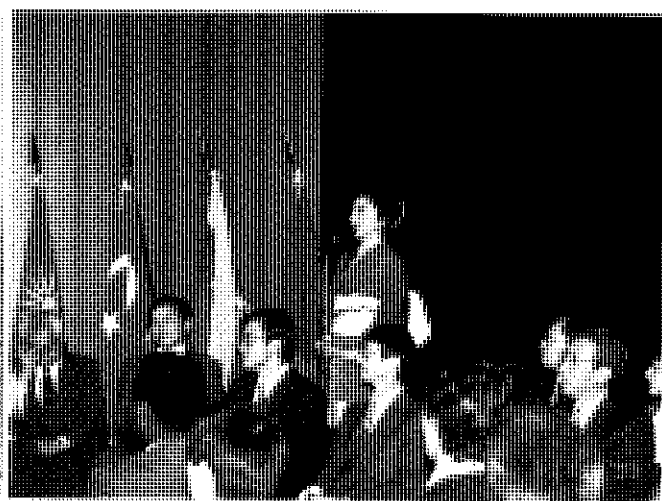
佐々木 おかげさまで、もう十四年続いていますよね。会長はずっと眞鍋先生で、事務局長が中島先生から吉田博美先生に変わった。古い方はだんだんいなくなるかもしれないので、新しい方もリクルートして。



参議院議長公邸で (15年3月)



同 (97年2月)



アジ研時代 よく着物を着て司会をしていた (95年11月)



十年会（16年2月）

ロオーバーくらいです。

—— ピアノは最近もやっておられるんですか。

佐々木 先生に付いてはやっていないんですけど、時間があればよく弾いています。両手を動かしていると気持ちが悪く落ちてくるんですよ。右脳と左脳、仕事とは違う脳を使っていて脳がほぐれたなと自分でも分かります。

今は好みがバッハに戻って、バッハ作品を順番に。「フランス組曲」「イギリス組曲」から「バルティータ」というちょっと難しいのをやって、今は「平均律二巻」を順に。後は「フーガの技法」など、バッハはたくさんあります。何か急にバッハはいいなと思うようになりました。

—— なるほど。少し古典の方に遡って。

佐々木 ロマン派のショパンやリスト、印象派のドビュッシーもよく弾いていましたが、わりと飽きがきます。右手がメロディーで左手が伴奏と決まっています。時代を少し遡って古典派のモーツァルトやベートーベンではメロディーはロマン派ほどよくなく、作品番号順に弾いたりしていましたが、基本、右手メロディーと左手伴奏は変わらない。

でもって最初に戻ってバッハがいいなと。当時はチェンバロで強弱がつけられなかったので、バッハ作品には強弱記号はないし、速度表示もほぼなくて、ある意味自由です。とにかくメロディーらしいメロディーがなくて、両手の比重が同じで、対位法で曲を作っていくので、聞いても弾いても断然落ち着きます。

—— やっぱ、ゴシックがいいと。



芍薬会（16年9月）

—— 吉田先生がいろいろ新人をリクルートしてくれるからね。結構面白いですね。

佐々木 我々で一方的に日程を決めて投げるわりには、いつも十五、六人ぐらい来られますよね。あと、中島先生がやはり幹事をやって下さって、私が二年前に会長になった同期の「十年会」も二年に一度やっていますよね。

—— いつも大変お元気そうなんですけれども、何か健康法はありますか。

佐々木 よく聞かれるんですけど、それが別になんてですよ。運動は苦手だから、しないし。歩くのは好きだからよく歩いていますが。性格が楽天的なのがいいんでしょうね。すごく嫌なことがあっても、とにかくおいしい物を食べてよく寝たら、明日になったら多分これは忘れていようみたいな感じですよ。

—— おいしい物を食べても余り太れない。

佐々木 そうですね。幸いさほど太りませんね。無茶食いとかな茶飲みとかしないし、スナック菓子は食べないし、揚げ物などカロリー高めよりは和食のあっさり系が好きだし、といった食生活なので。

あと、姿勢が良いことが大きいようです。姿勢を保つのに背筋・腹筋が必要なので。これは、高校生の初め頃、ピアノに進むかもと言うことで声楽を習いに行かされ、レッスンの初めに、まず胸を張って背筋を伸ばして、腹式呼吸でと言われた。声楽はうまくなりませんでしたが、良い姿勢が大きな財産になりました。二十五歳のときの体重を維持できればよいのですが、一〜二キ

佐々木 いいですね。日本でも、法隆寺とか昔の建築物には絶対飽きが来ないじゃないですか。バッハはそういう建築物と同じだなと。

—— 千何百年ちゃんと保っているという、それだけの価値がある。

佐々木 クラシック音楽というのは実はとつても歴史が浅くて、音楽の父バッハですら、十七世紀から十八世紀の人なんです。人類の歴史から見ると断然新しいですよ。

バッハ以前にルネサンス期の音楽というのがあって、それは基本的に宗教音楽で歌がついています。バッハがバロックスタイルを完成させて、それ以降がクラシック音楽の歴史。せいぜい三世紀程度の短いものです。

—— 終わりに国政なり国会に望むということをお聞きしたいと思いますが。

佐々木 これは自民党にも問題あるんだろうけど、野党も、森・加計が始まったら森・加計ばかりとかね。この国をどう進めていくんだというのが全然見えない。

—— そうですね。それはありますね。

佐々木 私が国政に関与していたことを皆さん知っているからでもあるんですが、あちこちで「本当に情けない」と言われま

す。  
—— 日本国が将来どうなるんだ、どうするんだという議論がもつと出てこなくちゃいけない。

佐々木 きれいな政治はいいんだけど、もちろんそれは大事か

もしれないけど、きれいな政治をやって、じゃ、どこへ持っていくかとしているの、日本をどういう国にしていくのかというのが、経済も含めて、外交、日本はどこに拠って立つのか全然見えなくて、正直不安です。

—— 何かその場その場で、短期的視野で終始している。

佐々木 次の国政選挙しか考えてないみたい感じがする。もちろん、野党だけの責任じゃないんですけど、すごく思いますね。

—— いろいろ聞かせていただいて、今日はお忙しいところ、本当にありがとうございます。